The Association for Northeast Asia Ragional Studies

第九師団と南京事件

岡　野　君　江
（現代史研究者）

南京虐殺に関しては、かってはその存在そのものが論議されたが、現在はそれをまぼろしとする論はかげをひそめ、論争の争点は虐殺の規模とその組織性の有無に移っている。現在の論争の主役は、南京事件調査研究会という大学の研究者を中心としたグループと、旧陸軍将校の団体である偕行社であり、前者は最近になって洞富雄氏の「20万をくだらない中国軍民の犠牲者が生じた」(1) という数字を「戦死者を含む」として、虐殺数は「少なくとも十数万」、(2) そのうち虐殺された中国軍兵士の数は「８万余」(3) と若干の訂正を行った。一方、偕行社も平成元年初版、５年改訂版の『南京戦史』で、中国軍で撃滅処断された者１万6000、一般市民の被害１万5760以下、合計３万1760以下を提示し、(4) 3000～6000、あるいは１万3000人程度としていた従来の主張を修正している。また拓殖大学の秦郁彦氏は昭和61年に虐殺数を３万8000～４万2000とする説を発表した。(5) しかし、研究者の主張は南京防衛中国軍の総数、陥落時の南京の人口の見積りで依然として大きな隔たりをみせ、南京陥落の混乱で敗走した敗残兵の殺害、軍服を脱いで外国人の設けた国際安全区に逃れた敗残兵を狩りだした“便衣兵（民間人の服を着た兵）狩り”を正当な戦闘行為の延長とみるか国際法上許されない不法行為とみるかで大きく異なっている。一方中国では、戦後にＢ級戦犯を裁いた南京地方法院の虐殺数30万余の数字を上方修正する40万という数字が発表されている。(6) この数字は秦氏によると「数少ない生存者の記憶による証言」を加算したもので、日本側の研究との隔たりが大きいものである。“南京虐殺”の研究は日中双方での実証的な研究が求められる段階へ入ってきたと言えよう。本稿は南京攻略日本軍の主力部隊の一つであった金沢第九師団の足跡を追うことを目的とする。また“南京虐殺”、及びそれに付随して行われた強姦、略奪、放火等の不法行為への第九師団の関与についても言及していきたい。尚、論を進めるに当たって、第九師団の中国大陸上陸から南京駐屯終了までの時期を１．上海付近での激戦、２．南京への追撃戦、３．南京攻略戦、４．南京での敗残兵狩りの４期に区分して、その足跡と不法行為を追うことにする。南京での不法行為は上海から南京への追撃戦にその萌芽をみるということはもはや研究者のあいだでは常識となっているからである。

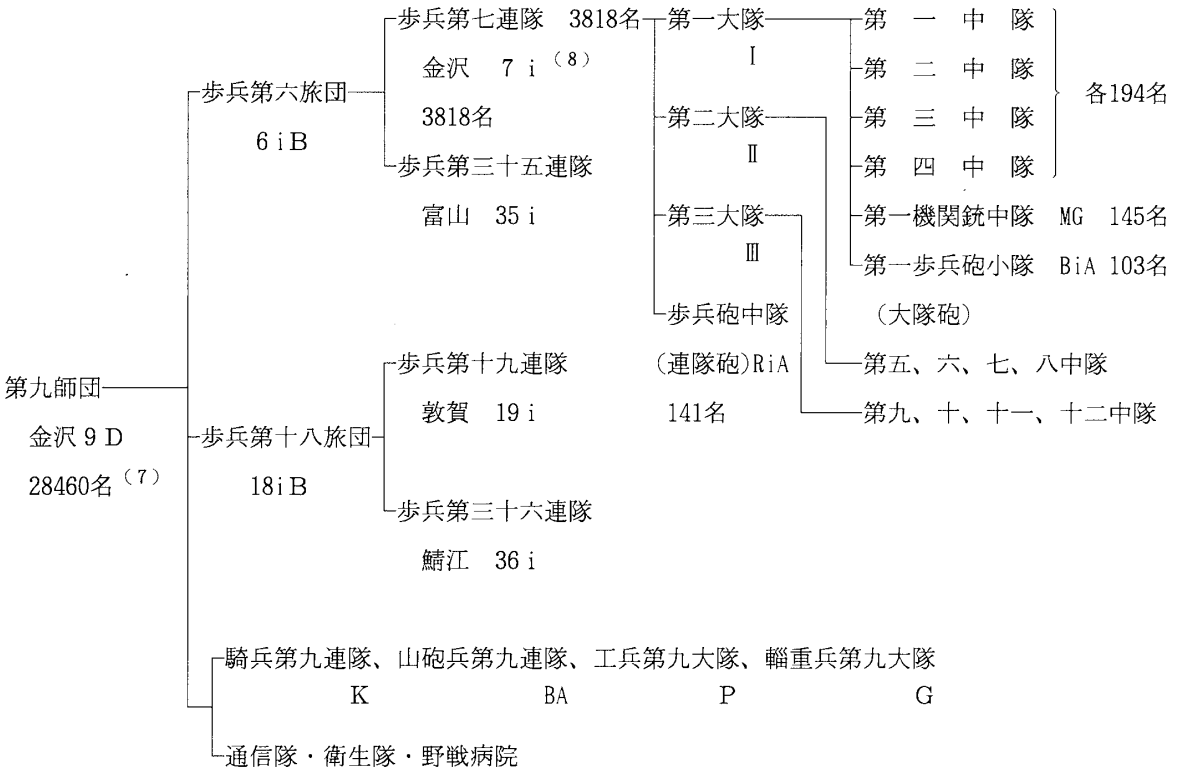
１．上海付近での激戦（9/27～11/8）

第九師団は1937年（昭和12年）９月27日に上海派遣軍の増援部隊として中国大陸に上陸し、10月１日に戦列に加わった。次頁の表１は出征時の第九師団の編制である。

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

表１　第九師団の編制



戦場となった揚子江下流のデルタ地帯には蔣介石直系の中央軍が堅固な陣地を構築しており、第九師団は、中国軍の十字砲火と異常気象による連日の雨に苦しみ、多くの犠牲者をだした。約１ヵ月経過してやっと上海近郊の蘇州河に達したが、10月28日時点での第九師団の戦死傷者は実戦部隊である歩兵部隊では63％にも達している。(9)

激戦の中で敵兵に対する憎悪は増大し、参戦者のＡ氏は「クリーク（デルタ地帯の農業用水）に浮かぶ敵兵の死体を何度も銃剣で刺しました」と話され、同じく参戦者のＢ氏は「こんなに戦死者が多いのは連隊長（当時の第七連隊長伊佐一男氏）の作戦がまずいからだと、金沢の留守宅に石を投げるものがあったんですよ。・・伊佐さんはとても真面目な性格で、突撃の時間になると敵が盛んに発砲している時でも突撃命令をだすといって恨む者もいました」と話されている。

憎悪は当然の如く中国人の捕虜にもむけられた。戦闘参加の翌日の10月２日に早くも捕虜殺害の記事を兵士の日記に見出すことができる。

〔第七連隊第一歩兵砲小隊　Ｎ・Ｙ日記〕

10月２日　この村には非常に多くの支那人がゐた。銃殺と言うので引き出して来たのを見ると、十数人も居た。(10)

以後、兵士の日記から拾い上げてみると、10月29日に７名（第三十六連隊乙副官菅原茂俊日記）(11)10月20日に３名、11月２日に１名（第三十六連隊第五中隊山本武日記）(12)と断片的ながら、既にこの時期に捕虜の処刑が行われていたことが推測できる。しかし、不法行為の規模そのものは後の３期と比べれば小規模であった。

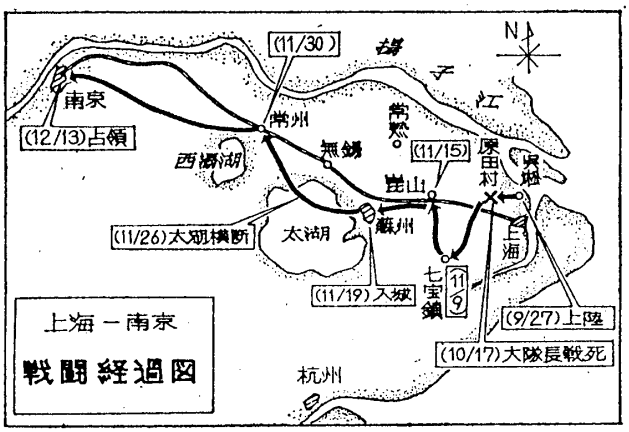
NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

2．南京への追撃戦（11/9～12/9）

1ヵ月の激戦は11月5日の第十軍の杭州湾上陸で大きな転機をむかえた。中国軍は総崩れとなって、9日未明崑山方面へ退却を開始したのである。しかし、「やれやれ、戦いはこれで終わった」[13]という兵士の正直な気持とは裏腹に、敗走する中国軍を追って南京を目指す追撃戦がはじまり、一番乗りを競う日本軍各部隊の先陣争いは熾烈なものとなった。しかもこの追撃戦は全く計画外に行われたものであり、この上海―南京間の約400キロは『第九師団戦史』によれば、「殆ど糧秣の補給を受けることなく、専ら現地調達の物資だけに頼り、追撃を実施しなければならなかった」[14]。

図1　上海―南京　戦闘経過図



注）北陸中日新聞「ああ歩兵七連隊」10　昭和44年11月27日

現地の状況を追認する形で、12月1日には南京攻略の大命が下り、翌2日には上海派遣軍司令官に皇族朝香宮鳩彦中将が任命される。

1　捕虜の取扱いについて

表2は、第七連隊の戦闘詳報の附表としてついている鹵獲表の追撃部分の数字と『第九師団作戦経過の概要』[15]に記載されている数字をあわせたものである。上海戦の最終局面、蘇州河で中国軍が退却を始めた時と蘇州までの追撃戦で多くの捕虜を捕獲している。しかし、蘇州以後の追撃戦、南京攻略戦では突如捕虜の数字がゼロとなる。これは何を表わすのだろうか。

表2　第九師団の捕虜の取扱い

第九師団			第七連隊		
捕虜	遺棄死体	月／日	俘虜	遺棄死体	月／日
221	13,300	9/29～11/11	4	69	9/29～10/ 4
			3	530	10/ 5～10/ 7
			28	885	10/ 8～10/22
			5	725	10/23～10/27
			101	810	10/28～11/10
350	2,000	～11/19	90	128	11/11～12/ 6
0	1,200	～11/27			
以後、記載なし			0	505	12/ 7～12/13

注）『第九師団作戦経過の概要』『歩七戦闘詳報』より作成

第九師団経理部衣糧科附部員以下行動一覧表11月22日の項に「歩三五収容ノ捕虜百四十名野戦倉庫ノ使役トシテ使用スルコトトナレリ」[16]とあり、『作戦経過の概要』の記述にもかかわらず、捕虜ゼロのはずの11月20日以降も捕虜が存在していたことは明らかである。

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

しかしこの頃となると捕虜としていったん収容される間もなく処分されるのが普通になっていた。この頃から捕虜という表現に代わり“敗残兵の殲滅”という表現が登場する。

11月19日　蘇州にて敗残兵約1000を殲滅（第九師団作戦経過の概要）

11月29日　第二大隊ハ査枢了河橋附近ニ於テ約六、七十ノ敗残兵ト衝突約四〇ヲ射殺他ヲ潰走セシメ更ニ滬湖上ニ於ケル敗残兵約四〇〇名ヲ撃沈殲滅ス（歩七戦闘詳報）

特に歩七戦闘詳報が注目される。ゴチック体の部分はガリ版刷りの戦闘詳報に伊佐氏がペン字で後に追加記入された部分である。陸上自衛隊野田駐屯地にある尚古館で発見した。B氏が筆跡を確認するとともに「聞いています。第二大隊は（上海戦の）原田村（戦死した大隊長の名をとってそう呼ばれていた）で大損害をだしていますからしかえししたんでしょう」と証言された。“捕虜”から“敗残兵”へと微妙な認識の変化の裏に、1日60キロの行軍もあったという苛酷な追撃戦と、捕虜の処分が日常茶飯事となっていった状況が推察できる。次の日記はその状況を顕著に示すものである。

〔第七連隊第一中隊　水谷荘日記〕

12月9日　敵の敗残兵が、血でべたべたになって出て来た。俺に向かって何かと話しかける。こんな奴にかかわり合う元気もない。「おーい残敵だぞ」。誰に云うまでもなく俺が声を立てた。昨日来の甚だしい疲労（戦闘後、山地の強行軍。敵兵が隊列に紛れ込んで行進。兵士は歩くことで精一杯）で気付く者は誰もなかったが、それでも元気なのが銃を持って出て来て一発見舞って再び行進に移る。(17)

2　蘇州郊外での農民殺害について

この追撃戦の時期になると民家に老人や子供の姿がちらほらみられるようになった。参戦者のC氏は「老人は別として、戦場に四、五十代の男がいると、のろしをあげたり、こちらのようすを探ったりするために残っているんだと思いました」と暗に殺害を認められ、B氏は「戦場になる前に皆逃げてしまって、農家には誰もいなかったです。私達は物陰に隠れて帰ってくるのを待ちました。そして皆殺しです。どの農家も抗日のスローガンであふれていましたからね。・・・このあたりみなそうです」と上海、南京、徐州、漢口のあたりを大きく丸を描くように示された。農民殺害について文章になっているものを入手することはできなかったが、ここに一つ事件を提示したい。本多勝一氏の『南京への道』に取材されている事件と、第九師団の南京への進軍行程を照らし合わせてみて、一つ疑わしい事件が浮かびあがってきたのである。それは蘇州郊外梅巻村で起こった。以下、要約である。

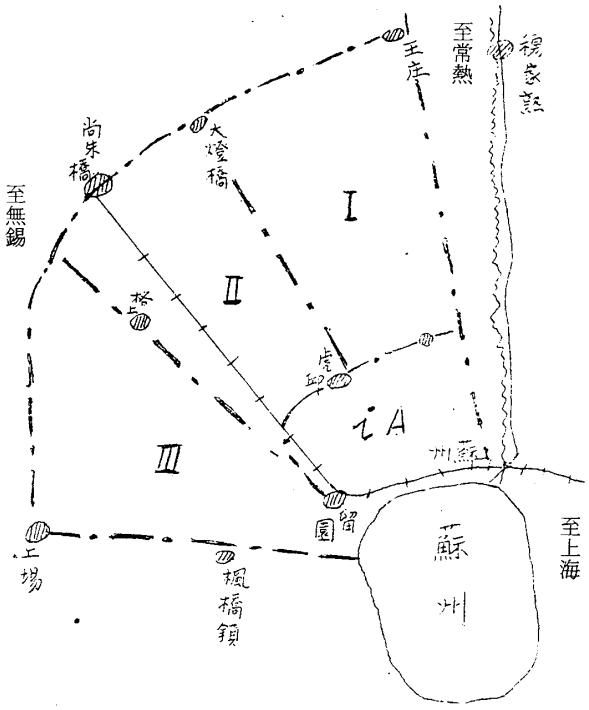
蘇州郊外の村の住民は逃げたり逃げなかったりだった。呉水金さん（当時11才）は一時避難したものの11月21日帰村して日本兵により一軒家に閉じ込められた。この家には60人前後の人が閉じ込められ、外へ連行されて殺された。王木根さん（当時32才）は同日通行人として梅巻村を通りかかり、別の家に連行された。この家では次々と連行されてくる人が銃殺され、100人以上200人までの人数が殺害されたのではないかという。3日目に日本兵の気配がなくなったので自宅へ逃げ帰った。(18)

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

図２は『歩七戦闘詳報』に附図として示された11月21～22日の蘇州城外掃蕩の第七連隊担当区域である。「蘇州城の北側に接する郊外にあり、上海―南京をむすぶ鉄道のすぐ北側の小集落だ。集落のよこを北の常熟へ通ずる幹線道路がとおり、それは200メートルほど南の洋涇角で上海―無錫の幹線道路に三差路となってつながる」とされる梅巻村の位置と重なる。さらに、以下は19日21時に蘇州に進入した金沢第七連隊の翌日からの行動の『金城聯隊史』からの抜粋である。証言と一致するところが多い。

図２　蘇州付近掃蕩区域図



注）『歩七戦闘詳報』より

20日　聯隊は蘇州東北部に集結して

21日　聯隊は宿営地付近の掃蕩と物資の収集を行っていたが

22日　聯隊主力は昨日同様、宿営地付近の掃蕩と物資の収集

23日　聯隊主力は上陸作戦用資材（注・太湖横断用）、携帯口糧の徴発その他の作戦準備。

24日　略

25日　聯隊主力は湖上機動のため、○六○○蘇州を出発[19]

さらに『歩七戦闘詳報』の11月21日に「聯隊ハ・・宿営附近ノ掃蕩及物資蒐集ヲ行フ　残敵ハ便衣（民間人の服）ニ着換ヘタル者若干アルノミ」とある。

３　追撃途中のその他の非人間的行為について

山本武は、翌年の徐州作戦の際の日記に「行く町々で目ぼしい金品を強奪して来たり、姑娘を強姦したり、良民を殺害したり皇軍軍人にあるまじき行動をしてそれを得々と自慢しているのを見て、なんと情けない兵隊かと残念でしかたがない」[20]と書いている。追撃戦ではどうだったのだろうか。食料や駄馬の徴発に関しては罪悪感は全くない。それどころか次頁の表３にみるように“蒐集スヘキ物資”として『歩七戦闘詳報』に堂々と記載されている。代金を支払って調達したのではない。第十九連隊の宮部一三氏によれば「戦場付近は一般民衆は避難して留守が多く、従って物資の徴発は即ち掠奪行為であった」[21]。しかも徴発にでかけた兵士は軍ニ於テ利用スヘキ一切ノ物資以外の個人的欲得ずくの略奪もついでに行うことに何の躊躇いももたなくなっていった。水谷日記の11月23日に「皆は三三、五五徴発だと云って思い思いに街に消えて行く。そしてタバコ・洋酒・粉ココア・粉ミルク・角砂糖等何でも持ち帰ってきた」[22]とある。骨董品を持ち帰る者もいた。

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

表３　第七連隊の物資収集要領

歩七作命第七三号別冊、蘇州附近掃蕩及物資蒐集要領

１．蒐集スヘキ物資特に舟、薪炭、陣中事務品、其他軍ニ於テ利用得ヘキ一切ノ物資（着眼スヘキモノ別紙ノ如シ）

２．糧秣運搬具

別紙

一、主食（糧米、精麦）

二、調味品（味噌、醤油、砂糖、食塩等）

三、肉糧

四、馬糧（大麦、小麦、豆粉等）

五、薪炭

六、筆、紙、墨

七、針、糸

八、煙草、酒

九、運搬具（荷車、手車、舟等）

注）『歩七戦闘詳報』より

また、人夫の強制連行と殺害に関しては第九師団経理部将校であった渡辺卯七氏の記事を吉田裕氏が紹介している。[23]N・Y日記には人夫として使用した少年に昼食や砂糖、証明書などを持たせて帰宅させた記事があり、水谷日記にも同様な記事がみえるので、殺害が一般的だったとはいえないが、B氏は「捕虜は人夫として使用したのち帰しましたよ。ただし、二度と武器を持てないようにして。手や足を（身振りで切る動作）・・片づけたのもいます」と話された。B氏はまた部落民殺害の前の強姦、幼児の水濠への投げ捨て、部落民殺害後の放火を認められた。また菅原茂俊日記の11月11日には「本部に女が居り不思議に思った処が逃げ遅れた者。・・・昨夜は寺田中尉がダイてねた」とある。

しかし、第九師団の場合、常に第一線におかれ苛酷な行軍を強いられたため、疲労困憊しており、蛮行を働くゆとりはD氏によると「３日に１ぺん、10日に１ぺん」ぐらいで、他師団に比べ数の上では少なかったという。

３．南京攻略戦（12/10～12/13）

笠原十九司氏の『南京防衛戦と中国軍』によれば、上海戦以後総崩れとなった中国軍は南京まで退却を続け、南京城壁を背にする首都防衛戦でようやく日本軍と再び対峙した。しかし、一番乗りを競って南方から南京に殺到した日本軍各部隊の進撃速度は予想を上回り、12月12日には、南京防衛中国軍は日本軍に完全に包囲されてしまった。しかも、南京北方には揚子江がひかえ、包囲された中国軍の退路はなかった。この結果、揚子江を渡江したり、日本軍の包囲網を正面突破して活路を見出そうとした中国軍の多くが日本軍に捕まり、捕虜として処分されたり、敗残兵として殲滅されることとなったのである。[24]これに第九師団はどのように関わったのだろうか。第九師団傘下の各連隊は13日の夜明け近く相次いで南京に入城した。中山門から入城したのは富山の第三十五連隊、光華門から入城したのは鯖江の第三十六連隊と敦賀の第十九連隊、金沢第七連隊は両門の間の城壁の２ヵ所の破損場所から入城した。

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

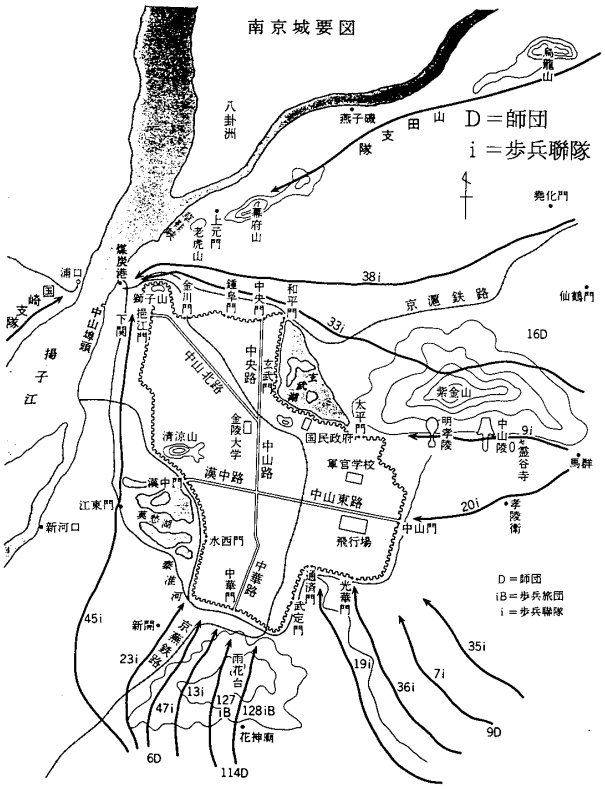
1　第三十五連隊の中山門城壁での捕虜殺害について

東京日日新聞の鈴木二郎記者が目撃した事件で、はやくから知られていた事件である。「25メートルの城壁の上に、一列にならべられた捕虜が、つぎつぎに城外に銃剣で突き落とされていた」という事件であるが、この事件の真偽について、まぼろし派の山本七平氏と南京虐殺の研究の草分け的存在である洞富雄氏との間に長い論争が続いている。尚、第十六師団の仲畑靖七氏の手紙に「九師団がやったらしいです」と書かれている。[25]

2　光華門の城壁の外における第十九、第三十六連隊の捕虜殺害について

第九師団の前面を城壁を背にして守っていた中国軍第八十七、八十八師は上海戦でも第九師団と戦った中国軍の精鋭部隊で、12月10日からの3日間は激戦だった。兵士の日記もそれを反映して捕虜殺害の記事がふえてくる。

図3　南京城要図



注）藤原彰「南京大虐殺」岩波ブックレット．1985年

〔第三十六連隊第五中隊　山本武日記〕

12月11日　（中国兵8名を、山本と他1名が）死刑執行する。

12月12日　午後、第六中隊の兵隊が、飛行場（城外）附近にて捕虜にした敵兵30名を前の畑に連行し、全員殺して、穴を掘り埋める。残酷と思っていたら、われわれ中隊も飛行場方面の残敵掃蕩に行き、26名の敵兵を捕らえて来て、これは後続部隊の砲兵や輜重兵に分配して、処置を委す。当然かれらの試し斬りにされたと思う。

〔工兵第九連隊第二中隊　富岡貞頼氏の投書　1988年8月6日　朝日新聞〕

（12月13日　光華門郊外七欧橋の部落で）

そこには、30人余りの若い中国青年が、1本の綱で後ろ手に縛られ、横一列に正座させられていた。福井県の1少尉が、軍刀を振りかぶり、一番端から斬首している。

3　光華門と中山門を結ぶ城壁外での第七連隊の捕虜殺害について

『金城聯隊史』には、第七連隊第一大隊は12月11日、南京郊外の「工兵学校に進入、残敵を掃蕩した。・・敵はいよいよ城壁近く圧迫され・・・夜に入り退路を失った残敵は数十名ずつ一団となって、右往左往していたが、第一線部隊は主として銃剣によりこれを撃滅した」と記されている。[26]この文章は第七連隊の捕虜殺害を反映したものと考える。

〔第七連隊第一歩兵砲小隊　N・Y日記〕

12月12日　昨夜の三階建（工兵学校）に篭もっていた敗残兵を全部引き出して処分してしまっ

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

た事を聞いた。

尚古館に昭和14年発行の写真集『戦塵』が寄贈されているが、その中に「工兵學校と捕虜」と題する写真がある。発行者島村喜久二氏によると、伊佐連隊長の命により皆が従軍中に持っていた写真から編集し、分配したものだそうである。捕虜は17名写っていた。

〔「敗残兵続々投降」12月13日北国新聞号外　12日発〕

我が伊佐（第７連隊）・富士井（第35連隊）両部隊の前面を彷徨する敵敗残兵は12日夕刻より続々投降し来たり午後10時現在60名の兵と１名の士官を捕虜とした。

『歩七戦闘詳報』の12月13日の7i攻撃経過要図に第七連隊前面の敗残兵の集団が記載されており、Ｂ氏も白旗をかかげた敗残兵がいたことを証言されていたが、今回の聞き取りで第二機関銃中隊のＥ氏が「城壁の外で300から400名ほどを銃殺し、穴に埋めました」と重要な証言をされた。日時の記憶がはっきりしないが、「入城前でも、南京から常熟に移動する時でもない。場所は中山門を出て、右へ曲がった城壁の外」ということである。南京事件調査研究会の現地調査の際、第八十七師の旅長だった陳頤鼎氏が「歩行不能の重傷兵を工兵学校にあった陣地に置き去りにして撤退したが、14日に日本軍の機関銃で掃射されてしまったと生き残りの営長から聞いている」[27]と証言していることとの関連で注目される発言である。

4　光華門から中山門を結ぶ城内での死体について、またその他の留意点

東京日日新聞鈴木二郎記者の証言によれば、「光華門につうじる道路の両側にえんえんとつづく、散兵壕とみられるなかは、無数の焼けただれた死体でうめられ、道路に敷かれたたくさんの丸太の下にも、死体が敷かれて」いた。[28]しかし、第十九連隊の土屋正治氏は光華門から入って市の南西方面を掃蕩していった時の状況を「ポツンポツンと死体があるという状況」と証言している。[29]全く相反する見聞をめぐって、これも早い段階から洞富雄氏と山本七平氏の間に論争がおこなわれてきた。しかし、光華門近くにおける虐殺の中国側証人は少なく、南京市文史資料研究会編の『証言・南京大虐殺』でも「市民の宋懐泉は大光路小朋口で」「行商人の湯志源は光華路61号で」「郎加興は大光路で」[30]殺されたという３例が目につく程度である。第七連隊のＤ氏は中山門と光華門の間の小路の側溝に死体がたくさんあった事を証言され、「わしらが一番早く行った日本軍部隊のはずなのに不思議でしょうがない。富山の部隊は飛行場の北側を通ったはずだ」と話されている。今後の研究が待たれる分野であると言えよう。

また第十九師団が攻撃に加わっていた雨花台は大虐殺現場の一つとされている。２～３万体あったという遺体のかなりの部分が戦闘による死者であり、第十九連隊は雨花台のほんの一部を攻撃したにとどまるが、これへの関与も今後検討されるべきテーマであろう。その後、第十九連隊が南京郊外の湯水鎮にあった上海派遣軍司令部を襲撃した敗残兵の集団の掃蕩に派遣され、14日に百数十名を掃滅した[31]以外は、第十九連隊と第三十六連隊は掃蕩任務を受けず城内東南部地区に宿営待機した。土屋氏によれば、以後の戦闘行為はなく捕虜を捕らえたこともないという。

NII-Electronic Library Service

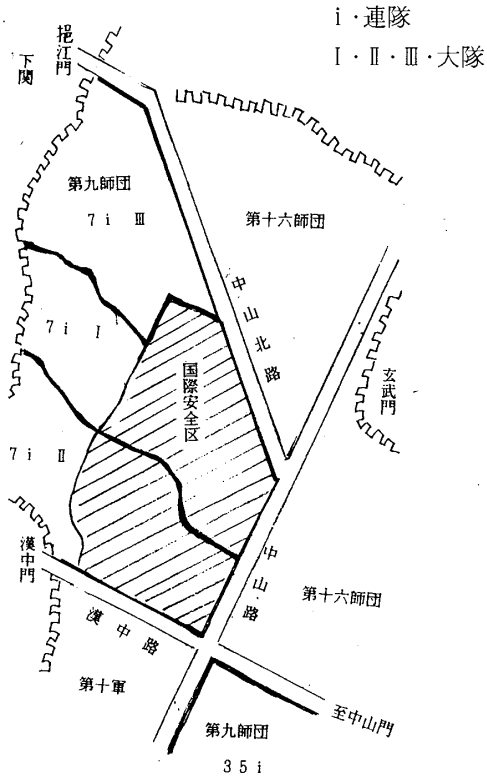
The Association for Northeast Asia Ragional Studies

4．第三十五連隊と第七連隊の敗残兵狩り（12/13～12/24）

第六旅団（第三十五連隊と第七連隊）は図４の地区の“掃蕩”を担当した。金沢第七連隊が担当した地区の中に、貧しい市民や避難民を救うために南京に留まった22名の外国人が設けた国際安全区（難民区）があり、ここでの“掃蕩”が第九師団最大の疑惑である。

これに関して『第九師団作戦経過の概要』『第九師団戦史』『歩兵第七聯隊史』『金城聯隊史』は申し合わせたように口をつぐむ。北国新聞も同様である。しかし、世界にいち早く“南京虐殺”として報じられたのはこの安全区における日本軍の行動であった。残留外国人の見聞が伝わったのである。整理してみよう。

図４　南京市内掃蕩担当区域図



注）『歩七戦闘詳報』より作成

13日の午前11時、安全地区にはじめて日本軍の侵入が知らされました。・・・それは小さな分遣隊でしたが・・・日本人部隊の出現に驚き、逃げようとする難民20人を殺したのです。・・・ i

一方、われわれは、逃げることができず保護を求めて安全区にやってきた兵士たちを武装解除するのに本部で忙殺されていました。・・・

14日の火曜日に、日本軍が、町になだれこんできました。・・・ある陸軍大佐が部下をつれて私の事務所を訪れ、一時間もかかって“6000名の武装をすてた兵士”がどこにいるかを知ろうとしました。（安全区管理責任者フィッチ氏の手紙）(32)

14日、日本軍将校一名が司法部へやってきて難民の半数を取り調べ、そのうち200～300人を元中国兵として逮捕・連行し、350名は一般市民として残した。・・・ ii

（日本大使館提出文書）(33)

その夜（15日）・収容所の１つにいる全部で1300人の難民を、兵士がつれだして銃殺しようとしているという知らせがありました。・・・男たちは着剣した兵士達によって整列させられ、100人ぐらいずつ一団にして数珠つなぎにされました。・・・ iii

（16日）日本軍が法学院（司法部のあやまり）および最高法院の難民を全部拉致してゆきました。・・・われわれの民警も50名連行されました。・・・ iv（フィッチ氏）(32)

文中のｉ、ii の事件はｉが熊本第六師団、ii が京都第十六師団の手によるものであると判明している。金沢第七連隊が本格的に安全区の“掃蕩”を開始するのは15日以降である。第七連隊と第三十五連隊の行動を偕行社の『南京戦史』により追ってみよう。

【12月13日】

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

午前７時30分　第三十五連隊第二中隊が中山門を完全に占領、まず飛行場を占領した。同じ頃、第七連隊の各中隊も中山門と光華門の中間の城壁を占領して城内進入。

「掃蕩実施に関する注意事項」（抜粋）

(4)　青壮年はすべて敗残兵または便衣兵とみなし、すべてこれを逮捕監禁せよ。

午前11時30分　第七連隊が追撃開始。午後３時前後に帰還。

午後４時30分　「第六旅団作命第138号」下達。図４の掃蕩担当地域が示された。

【12月14日】

「捕虜・外国権益に対する注意」（抜粋）

(2)　各隊の捕虜は、その担任地区内の１ヵ所に収容し、その食糧は師団に請求せよ。

(4)　外国権益内に敗残兵が多数いる見込みであるが・・・各隊は外方より監視しておけ。

午前９時30分、戦車中隊（第六旅団に配属）が中山北路を前進し第七連隊第三大隊の掃蕩に協力。多数の捕虜及び兵器を鹵獲して午後５時30分帰還した。捕虜250名。この掃蕩間、反抗の気配があった敗残兵約70～80名を射殺し、残余を捕虜として収容した。(34)

尚、第七連隊第三大隊が飛行場に隣接する中国軍第八十八師営庭で100人くらいの捕虜を穴の前にひざまずかせ、銃殺刺殺していた現場が東京日日新聞佐藤振壽記者に目撃され、営門の哨舎に書かれた「伊佐部隊・棚橋部隊」の文字を写真撮影されている。(35)

〔歩七第一中隊　水谷荘日記〕

12月13日　市内の掃蕩に移る。・・・おびただしい若者を狩り出してくる。色々の角度から調べて、軍人らしい者21名を残し、残りは全部放免する。

12月14日　ひきつづき市内の残敵掃蕩。若い男子の殆どの、大勢の人員が狩り出されてくる。靴ずれのある者、面タコのある者、極めて姿勢の良いもの、目付きの鋭い者、等よく検討して残した。昨日の21名も共に射殺する。(36)

〔歩七第二中隊　井家又一日記〕

12月14日　（安全区で）約600名の敗残兵が外人の建物にあふれている。南京落城のため逃場を失ったのである。この処置を日本大使館に委任す。(37)

外国人の見聞と『南京戦史』により第六旅団の13日と14日の行動を整理してみよう。

1．原則として安全区の外国権益内には入っていない。

2．捕虜は存在した。処置は日本大使館に委任、釈放、射殺とまちまちである。

3．残留外国人の記録のうち13日のｉは第六、14日のⅱは第十六師団が実行者であり、15日になるまで安全区の外国権益内の掃蕩を行わなかった第七連隊の行動と一致する。

4．第三十五連隊の行動記録が乏しいが（城壁から）「城内はまだ四、五百米の畑地を行かなければならなかった」(38)という担当地域から考えると、たいした問題はなかったように思う。以後は、金沢第七連隊の行動に焦点をあわせていきたい。

【12月15日】

フィッチ氏の手紙にあるように14日、陸軍大佐が国際安全区委員会を訪れ“6000名の武装をす

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

てた兵士”の所在をつきとめようとしたが、委員会は「武器を持った兵士はいない」と主張した。交渉決裂！　14日午後7時に「六旅作命第139号」が発令される。ここには「両地区掃蕩隊ハ明十五日中ニ残敵ヲ掃蕩シ以テ南京城占領ヲ確実ナラシムヘシ」と記されている。明らかに方針が変わった。

この方針の転換について吉田氏が卓越した見解をしめされている。即ち、「最大の理由は国内の熱狂的な軍国熱」だったのである。国内の熱狂的な軍国熱がマスコミの「南京一番乗り」スクープ合戦を生み、13日の南京陥落後わずか3日を経たにすぎない17日に皇族である朝香宮上海派遣軍司令官も参加する南京入城式を挙行させることになった。皇族も参加する入城式に一人の便衣（民間人の服）の敗残兵も残存してはいけなかった。このような軍司令部の方針が「十五日中ニ残敵ヲ掃蕩シ」という作戦となったのである。(39)当時まだ2万5千人の敗残兵が市民の中に紛れ込んでいると考えられていたし、安全区の掃蕩を担当する金沢第七連隊長伊佐一男氏は「修身の先生のような」人物だった。

〔歩七第一中隊　水谷荘日記〕

12月15日　難民区に行く。中山路だろうか、広い道路はぎっしり路面を覆いつくして逃走の際脱ぎ捨てられたものの如く、支那軍の軍装で埋め尽くされていた。

〔歩七第二中隊　井家又一日記〕

12月15日（難民区の掃蕩）・・四拾余名の敗残兵を突殺してしまう。

ここで想起されるのが15日の夜、1300人の難民が100人ずつ数珠つなぎにされ銃殺された（iiiの事件）というフィッチ氏の手紙である。マギー師もその数を1000人もしくは2000人として14日の夜であったか、その翌日であったかとしながらも同様の見聞を残している。(40)また黄俊郷氏は極東国際軍事裁判の宣誓口供書で次のように証言している。

> 昭和12年11月（太陰暦）9日、日本軍ハ光華門近クノ城壁ヲ破ツテ進入シ、避難民地区に迫リマシタ。・・・ソレカラ2日後（15日）、日本軍は家宅捜査ヲ開始シマシタ。・・・最初ノ日に捕ラワレタ者ハ二千ヲ越シマシタガ、私モソノ中ノ一人ダッタノデアリマス。捕ラワレタ人ハ四列縦隊トナリ、避難民地区ヨリ揚子江の堤に沿ツタ各処ニ行進サセラレマシタ・・・夜ニ入ツテ日本軍ハ之ヲ殆ド殺戮シマシタ。(41)

東京朝日新聞の今井正剛記者もまたこの事件を目撃し、「死体の山」を見ている。(42)

また第三大隊に配属された通信兵のC氏は「大通りに面した学校のグラウンドで舞台の上に一人ずつ乗せた中国人を通訳が尋問し、ほぼ全員を大通りのトラックに乗せていた。第三大隊の者が立哨にたち、新聞記者も3人いた」と証言された。

以上により、15日に第七連隊による安全区の掃蕩が行われたことは明らかである。ただ気になるのは、洞氏も疑念をはさまれているように15日に2000名単位を下関で処刑した第七連隊側の資料が見当たらないことである。(43)

【12月16日】

前日の午後8時30分「歩七作命甲第111号」が発令された。

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

(1)　15日までに捕獲した捕虜を調べたところ、ほとんど下士官、兵のみで将校は認められない。将校は便衣に着替えて難民区内に潜入しているようである。

(2)　聯隊は明16日、全力を難民地区に指向し徹底的に敗残兵を補足殲滅する。

翌日に迫った入城式を控え、軍上層部や伊佐連隊長はあせっていた。

〔歩七第一中隊　水谷荘日記〕

12月16日　目につく殆どの若者は狩り出される。・・・各中隊とも何百名も狩り出して来るが、第一中隊は目立って少ない方であった。それでも百数十名を引き立てて来る。・・・市民と認められる者はすぐ帰して、36名を銃殺する。

12月17日　昨夜12時頃、非常呼集があって、第一機関銃中隊は揚子江岸に1200名の銃殺に行っていたが、夜に入り、それ迄死体を装っていた多数の相手に包囲され苦戦中との事。

〔歩七第二中隊　井家又一日記〕

12月16日　若い奴を335名を捕らえてくる。・・・揚子江付近に此の敗残兵335名を連れて他の兵が射殺に行った。

〔歩七第一歩兵砲小隊　N・Y氏追懐記〕

昭和12年12月16日　難民区内で各中隊定められた区画毎に辻々に立哨し、掃蕩・摘発した敗残兵と覚しき男たちを1ヵ所に集め、夕刻より命令に従い挹江門下関に連行しました。・・・私たち以外の部隊もそれぞれ同じように引率して来ており、相当な人数に上りました。およその見当では千単位ではないかと思います。

下関に着いてからも何をどうするという指示もなく大部時間がたちました。その中何処からともなく刺殺する部隊が出て来・・・[44]

尚、16日の下関での大量虐殺には多くの目撃者がいる。詳しくは洞富雄氏の『決定版・南京大虐殺』をみてほしい。16日は敗残兵掃蕩の総決算の1日であった。大隊毎に検証してみよう。（図4参照）第一大隊の掃蕩については水谷、井家両氏の日記、N・Y氏の追懐記である程度明らかになっている。聞き取りは第二、第三大隊について行った。

北方担当の第三大隊についてC氏は、第三大隊の兵が「2000人を5人ずつ縛り、揚子江へ連れていったが、一番端の5人の縄がほどけ、下関方面へ逃げだした。それを撃ったら、他の連中が殺されると悟り一斉にこちらのほうへむかってきた。銃で撃つわけにいかないから銃剣で突いた。わし1人で50～60人やっつけた。死体は河に流した。」と話しているのを聞いている。C氏によると、第三大隊長も顔面に3ヵ所ほど負傷していたという。また第三大隊のF氏は「16日朝早くから捕虜が騒ぎだした、逃げだしたというので第三機関銃中隊がでかけた。私達も後から挹江門の方へでかけた。私達は城壁の上から小銃で撃った。煤炭港まではいかない。その手前だった。捕虜の数は約3千。城壁の上から撃つので皆揚子江の方へ逃れる。無数の小舟につかまって河を渡ろうとするが流れが速く、どんどん流されていった。弾があたったのは10人のうち2～3人だと思う。3分の2ぐらいは逃げた」と証言された。

第二大隊については、残留外国人フィッチ氏の手紙にある16日の事件iv（司法部と最高法院か

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

らの難民拉致及び民警50名拉致の事件）について、連行された警察官の１人である伍長徳が極東国際軍事裁判で次のように証言していることとの関連性が問題になる。

12月15日（16日のあやまり）日本兵が司法院ニヤッテ来テ・・・我々ヲ無理ヤリニ市ノ西大門（漢西門）ヘ行進サセマシタ。・・・彼等ハ（門の）外部ヘ出ルト機関銃デ射タレ、ソノ体ハ坂ヲ転ゲテ運河ノ中ヘ落チマシタ。機関銃掃射デ殺サレナカッタ者ハ日本兵ニ銃剣デ刺サレマシタ。・・・日本兵ハ幾許ノ死体ニガソリンヲカケ、火ヲツケ、立去リマシタ。・・・約二千ノ前警官ト一般人ガ殺害サレマシタ。(45)

彼は犯人を中島部隊（第十六師団）と名指ししたが、司法部と最高法院は共に第九師団と第十六師団の担当区域の境界である中山北路と中山路沿いにある建物であり、漢西門と第十六師団の担当区域である北東部は市の東西の両端になる。しかも、他の師団の担当区域へ捕虜を連行し処刑することは軍隊の常識ではあり得ないことから、『南京戦史』は第九師団関係の事件として扱い、秦氏も「第九師団の可能性もある」(46)とされているのである。しかし、漢西門へ向かう漢中路沿いの地区の掃蕩を担当した第二大隊第六中隊のＡ氏は「下関へ行きました」と話され、第二機関銃中隊の分隊長であったＧ氏は「上海戦で多くが戦死して南京へ行ったのは17～18名。（重）機関銃は（４つのうち）１つしか使いものにならなかった。16日に連隊本部から指令がきて部下を５～６名派遣した。敗残兵が警察官の服を着て、警察官に混じっている。区別がつかないので全部始末するといって場所と時間を指定してきた。弁当を持たせてだした。500～600名を銃殺したと聞いた。場所は漢西門ではない。だだっぴろい広場だ。（地図で考えてもらう）飛行場付近だと思う。入城式があったところだ。すでに他の部隊によって集められていたのを撃った」と証言された。民警の運命についての全く新しい証言である。

また第二機関銃中隊の小隊長であったＨ氏は捕虜処分の命令の出所について、「連隊長や旅団長、師団長が捕虜を処分しろなんて重大な命令をだせるもんではない。もっと上からだ。伊佐さんもそれで困ってしまったんや」と言われた。伊佐氏は連隊長として初の戦いであり、吉住師団長、秋山旅団長は兵にとってはあまり存在感のない人物だったという。捕虜処分命令がどこからきたかということは“南京虐殺”の組織性をめぐる重大な論争点であり、今後この視点からの聞き取り調査を継続する必要性を感じる。

以上、15日から16日にかけて第七連隊の敗残兵狩りがピークに達したが、その総数がどれだけであったかということは長い間不明であった。『第九師団作戦経過の概要』に敵の遺棄死体4500、敗残兵殲滅7000とあるのが唯一の手がかりで、各師団は戦果を誇張するから実数はもっと少ないのではないかと言われていた。しかし、『南京戦史』は二つの重要な数字を平成元年の初版本で提示した。

１．第七連隊長『伊佐一男日記』

12月16日　三日間ニ亘ル掃蕩ニテ約六、五〇〇ヲ厳重処分ス。(47)

２．『歩七戦闘詳報』　自12月13日至12月24日　南京城内掃蕩成果表

刺射殺数（敗残兵）　　六、六七〇

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

歩七戦闘詳報の六、六七〇という数字は尚古館で伊佐氏直筆のペン字で記入されたものを確認した。晩年を金沢で書道を教えながら過ごし、昭和37年から昭和60年94才の生涯を終えられるまで、雨の日も雪の日も１日もかかさず早朝の石川護国神社への参拝を敢行されたという伊佐氏直筆は非常な達筆であった。『わが半生記』によれば、戦後、新潟と東京での裁判に伊佐氏は５回出廷した。そしてＤ氏によれば「その時この敗残兵の処刑数を約3000と証言された」。この数字は「真面目で修身の先生のようであった」という伊佐氏が後世に残したものと考える。南京事件調査研究会からもこれを否定する見解はでていない。また『作戦経過の概要』の約7000という数字も『南京戦史』が言うように他の連隊が掃蕩らしい掃蕩を行っていなかったことからみて順当かもしれない。

（大阪朝日新聞石川版12月25日平松特派員の記事に「南京城内はまだ残敵がうようよ」の見出しで「伊佐部隊（第７連隊）は一萬五千名、富士井部隊（第35連隊）は一萬近くの便衣姿の残敵を捕へてゐる」という記事がある。一応の考慮が必要であろう。）

尚、1.と2.の数字の違いは、1.が16日まで、2.が24日までの数字であることを考えれば納得がいく。しかも井家又一日記に次の記事がある。

12月22日　夕闇迫る午後５時大隊本部に集合して敗残兵を殺に行くのだと。見れば本部の庭に161名の支那人が神妙にひかえている。

17日以後も敗残兵狩りが小規模ながら続いていた。そして24日になって掃蕩の任務を解かれ、年末にかけて常熟へ移動したのである。次の徐州戦まで約３ヵ月滞在した常熟の日々を伊佐氏は「南京虐殺を引くまでもなく、硝煙弾雨の中で、荒れすさんだ兵士たちにとって・・・恰好のやすらぎの場になった」と昭和60年にふりかえっている。(48)

以下、南京での非人道的行為について述べておこう。

略奪は「南京への道」でも既にあたりまえのこととなっていた。特に住民が避難し無人となった蘇州で高級な洋酒を初めて口にし、羽根布団に初めてくるまった思い出を話される参戦者は多い。Ｎ・Ｙ日記やＣ氏の証言によれば、南京に入る前は「憲兵がたくさんいるから強姦と徴発はやってはいかん」と厳しく注意されていた。しかし、残留外国人の告発は厳しい。次はベイツ博士の友人への手紙の一部である。

> 目抜き通りでは、中国兵が主として食料品店や保護されていないウインドウなどからこまごまとした略奪を行っていましたが、それが、日本軍の将校の監視の下で店先から店先へと移る組織的破壊にとって代わられました。(49)

また、中山門において第九師団と先陣争いをし、含むところがあった第十六師団長中島今朝吾日誌には、第九師団に「到ル処ノ銀行ノ金庫破リ専門ノモノガアル」ことを名指しで非難し、担当区域において境を接している第九師団を「他ノ区域デアロウトナカロウト御構ヒナシニ強奪シテ往ク・・・結局ずふずふシイ奴ガ得トイフノデアル」(50)とあてこすった部分がある。しかし不思議なことに参戦者は「南京は既に空っぽだった」と話される。Ｃ氏は「避難した外国人の家は表に立ち入り禁止の張り紙がしてあっても裏から入って全部とられていた。中国人が留守番して

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

いる家は無事だった」と話され、G氏は「難民区で3階建てのデパートを宿舎にしたが残っていたのは人絹の靴下だけ」と話された。

最大の蛮行は強姦だった。16日午後に金沢第七連隊は宿舎を安全区内に移す。

（16日の）朝から強姦事件が報告されるようになりました。100人以上の婦人が兵士達に連行されました。・・・自宅で強姦された者はその何倍もいたに違いありません。

12月17日、金曜日　略奪・殺人・強姦はおとろえる様子もなく続きます。ざっと計算してみても、昨夜から今日の昼にかけて1000人の婦人が強姦されました。（フィッチ氏）(51)

12月18日　土曜日　8000人が避難していた金陵大学附属中学校に、昨晩は日本兵が10回も塀を乗り越えて押し入って、食料や衣類を盗み、気のすむまで強姦を犯していった。彼らは小さな男の子を銃剣で刺して殺した。（ロバート・ウィルソン）(52)

第七連隊の14日付「作命甲第107号」に「掃蕩地区内ニハ歩七外ノ部隊ノ勝手ナル行動ヲ絶対ニ禁止スベシ」とあるので、この頃の事件に第七連隊が関係するのは明らかである。「3人から7人の兵士の群が将校の監督もなくうろつきまわることから多くの事件が発生しています」（16日付日本大使館あて委員会文書）(53)という訴えをうけて、16日夜に「各大隊ハ担当掃蕩地区内ノ不正行為防止軍紀風紀維持ノ為、午前午后各一回ノ巡察将校ヲ派遣スベシ」（歩七作命号外）がでている。また、12月18日の日本大使館あて南京金陵大学緊急委員会委員長（ベイツ博士）の書簡で、「旧何応欽公館（金陵大学のすぐ南にあった）にある秋山部隊（第六旅団）本部の存在は、貴軍兵士が統制されるまではこの近隣にとって特別の脅威となっています」(54)と名指しで改善を求められてもいる。

略奪、強姦、外国権益に対する侵害の頻発は軍上層部でも問題とされ、第九師団を含む問題ある部隊を南京から遠ざける処置がとられた。しかし、その後安全区を担当するのはもっと問題が多かったといわれる京都第十六師団であった。かくして第九師団が去ったあとも強姦はとまらず、占領後1ヵ月にして国際委員会委員長ラーベ氏によると「少なくとも2万人」、ベイツ博士によると「ソレヨリ少シ前」の見積りで「強姦事件ハ八千」となったのである。(55)（一晩に1000人、1ヵ月に2万人という数字には誇張があるかもしれない）伊佐氏も（わが半生記で）「（常熟では）現地人の女性に迷惑をかけると都合悪いので、私は早速、上海から慰安婦を呼びました」と語っている。ただ放火だけは第九師団にあっては厳禁であった。フィッチ氏の手紙によると市内で放火が発生したのは19日以後であり、第十軍の担当する市の南部の繁華街がその中心であった。安全区では失火はあったが放火と呼ばれるような事件はほとんどなかったのである。

注

（1）洞富雄著『決定版・南京大虐殺』　1982年　徳間書店　145頁

（2）吉田裕著「南京事件をめぐる論争の争点」（洞富雄他編『南京虐殺の現場で』　1988年　朝日新聞社に収録）　39頁

（3）笠原十九司著「南京防衛戦と中国軍」（洞富雄他編『南京大虐殺の研究』　1992年　晩聲社

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

に収録）　315頁
（4）高橋登志郎編『南京戦史』　平成5年　偕行社　364～374頁
（5）秦郁彦著『南京事件』　昭和61年　中央公論社　214頁
（6）南京市文史資料研究会編『証言・南京大虐殺』　1984年　青木書店　162頁
（7）「飯沼　守日記」　12月24日（高橋登志郎編『南京戦史資料集Ⅰ』　平成5年　偕行社）166頁
（8）伊佐一男著『歩兵第七聯隊史　上海　南京戦』　歩七戦友会　1967年　1頁
（9）歩七戦友会編　伊佐一男監修『金城聯隊史』　昭和44年　200～201頁
（10）歩七一砲戦友会『一初年兵の手記　硝煙の合間にて』　私家版　18頁
（11）「菅原茂俊日記」（高橋登志郎編『南京戦史資料集Ⅱ』平成5年　偕行社　353～377頁に収録）
（12）山本武著『一兵士の従軍記』　1985年　安田書店　52～79頁
（13）陸自第十師団編『第九師団戦史』　昭和42年　147頁
（14）同前　151頁
（15）第九師団参謀部『第九師団作戦経過の概要』　昭和13年　（みすず書房『現代史資料9　日中戦争二』　1964年　223～233頁に収録）
（16）前掲『南京戦史』　23頁
（17）水谷荘日記「戦塵」（『歩七の友』№22　昭和61年）　15頁
（18）本多勝一著『南京への道』　1989年　朝日新聞社　53～74頁
（19）前掲『金城聯隊史』　208～209頁
（20）山本武著前掲書　149頁
（21）宮部一三著『風雲南京城』　昭和58年　叢文社　92頁
（22）水谷荘日記「戦塵」（『歩七の友』№22　昭和61年）　12頁
（23）吉田裕著『天皇の軍隊と南京事件』　1986年　青木書店　83頁
（24）笠原十九司著前掲書　253～262頁
（25）洞富雄著前掲書　51頁
（26）前掲『金城聯隊史』　216頁
（27）洞富雄他編『南京虐殺の現場へ』　1988年　朝日新聞社　238頁
（28）洞富雄著前掲書　28頁
（29）『南京虐殺　参戦者の証言』　文芸春秋　1984年12月号
（30）前掲『証言・南京大虐殺』　38～40頁
（31）「飯沼　守日記」　12月14日（『南京戦史資料集Ⅰ』）　156頁
（32）洞富雄編『日中戦争南京大虐殺事件資料集』全2巻　1985年　青木書店　第2巻　29～33頁
（33）同前　第2巻　132頁

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

(34) 前掲『南京戦史』　181～194頁
(35) 佐藤振壽手記「従軍とは歩くこと」(『南京戦史資料集Ⅱ』) 609～613頁
(36) 水谷荘日記「戦塵」(『南京戦史資料集Ⅰ』393～399頁に収録)
(37)「井家又一日記」(『南京戦史資料集Ⅰ』363～375頁に収録)
(38) 前掲『一初年兵の手記』　105頁
(39) 吉田裕著前掲書　136～143頁
(40) 洞富雄編『日中戦争南京大虐殺事件資料集』第1巻　88～89頁
(41) 同前　第1巻　383頁
(42) 洞富雄著前掲書　34頁
(43) 同前　35頁
(44) 前掲『南京戦史』　199～200頁
(45) 洞富雄編『日中戦争南京大虐殺事件資料集』第1巻　42～43頁
(46) 秦郁彦著前掲書　127頁
(47)「伊佐一男日記」(『南京戦史資料集Ⅰ』331～336頁に収録)
(48) 伊佐一男『わが半生記』(『歩七の友』№21　昭和60年　8～15頁に収録)
(49) 洞富雄編『日中戦争南京大虐殺事件資料集』第2巻　24頁
(50)「南京攻略戦　中島第十六師団長日記」(増刊『歴史と現代』　1984年に収録)
(51) 洞富雄編『日中戦争南京大虐殺事件資料集』第2巻　33～34頁
(52) 南京事件調査研究会編『南京事件資料集』　全2巻　1992年　青木書店　第1巻　281頁
(53) 洞富雄編『日中戦争南京大虐殺事件資料集』第2巻　124頁
(54) 南京事件調査研究会編『南京事件資料集』　第1巻　140頁
(55) 洞富雄編『日中戦争南京大虐殺事件資料集』第1巻　50頁

NII-Electronic Library Service

The Association for Northeast Asia Ragional Studies

The Land Force of Kanazawa and the Nanking Atrocity

by Kimie Okano

The land force of Kanazawa played a big role in the Nanking atrocity. Old soldiers, almost all of them over 80 years old, told what they had done in Nanking in 1937. The main members of the atrocity in Nanking were the soldiers of Kanazawa.

They had to ensure safety in the Nanking Safety Zone because a commander, who belonged to the Mikado family, would come there soon. A report says the soldiers of Kanazawa killed 6, 670 people. They didn't have enough time to distinguish civilians from the remnants of the defeated army. They not only cruelly murdered, but also plunderd and raped.

This is an objective and reliable study of the historical materials I have gathered in Kanazawa and of the testimonies of the soldiers themselves.

NII-Electronic Library Service